

## 論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	石原 渉（長崎県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第76号
学位授与の日付	平成26年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第2項
学 位 論 文 題 目	繫船具の変化とその文化史的研究 —石製イカリから鉄錨へ—
論 文 審 査 委 員	主査 門田 誠一（佛教大学教授） 副査 植村 善博（佛教大学教授） 副査 佐古 和枝（関西外国語大学教授）

### 〔1〕論文の概要

本論文は序章と本編七章および終章からなり、縄文時代から近世までの繫船具（碇・錨など時代等により多様な語と標記があり、以下では全般を指す場合は繫船具とし、論文中の時代・地域等の特定によって字句を使い分ける）について、その形態的变化を時代ごとに示し、その原因と史的背景等を考古資料・文献史料・絵画資料等を相互に用いて考察を行っている。

各章は独立しており、先史時代（縄文・弥生）、古墳時代、中世、近世における鉄錨の出現までを個別具体的に論じ、時代ごとの考察の相対として、繫船具を通じた船舶の構造や航海技術のみならず派生する問題に言及した内容であり、本書全体としては繫船具の検討によって各時代の生業や交通・交渉を論じた文化史的研究となっている。

論文の構成を章のみに限って示すと以下のとおりである。

#### 序章

#### 第一章 先史時代のイカリ

#### 第二章 古墳時代と古代のイカリ（碇）

#### 第三章 入唐求法巡礼行記にみる碇（碇）

#### 第四章 中世の碇

## 第五章 中世和船の碇

## 第六章 鉄製錨の登場とその原因

## 第七章(付編) 近年、国内で発見された碇石について

## 終章

このような構成にしたがって以下に本論文の内容を摘要する。

序章ではまず、研究の目的となる対象を時代ごとに抽出し、それらに対する研究方法を提示する。先史時代に関しては海浜部の遺跡から出土する遺物で礫石錘と古墳時代の古墳の石室内に描かれた線刻画や船形埴輪などから、当時の繫船具と船に関する検討をおこなう。古代・中世に関しては『入唐求法巡礼行記』『東征伝絵巻』『華嚴宗祖師絵巻』『蒙古襲来絵詞』などの文献や画像資料を用いて対照検討の必要性を説く。

このような目的と方法にそって、具体的に時代・時期ごとに時間軸に沿ったイカリ(碇)について個別具体的な考察を行うとともに碇という繫船具の変遷を具体的にたどり、石製碇から鉄錨への素材の変化をもって、繫船具の画期を設定し、時代ごとの形態の変化を見据えながら、文化史的背景に言及するという本研究の構成を示す。

第一章では縄文・弥生時代の礫石錘について資料を集成した後に、形態による分類を行い、出土状況等の基本的な知見を確認し、これらの遺物が独木舟の周辺で出土する例を示す。そして、この種の遺物を縄文・弥生時代に活用された丸木舟の繫船具として見た場合、すなわち丸木舟のイカリとして使用を限定できず、縄文・弥生時代の大型及び超大型の礫石錘は、その遺跡の立地や生業の在り方によって、明らかに違いがあり、海岸部に立地し、釣漁や刺突漁といった漁業活動を生業とした人々が使用し、大型魚類や海洋性動物を捕獲した後に、獲物の行動抑制のための錘として活用した可能性が高いことを指摘する。ただし、漁具として活用された蓋然性があることも排除できないことから、縄文時代の大型ないしは超大型の礫石錘は、丸木舟の碇としての用途が想定される場合もあり、多目的な錘として活用された可能性がある」と述べる。弥生時代の大型や超大型の礫石錘は、溝を彫って緊縛する方法がとられたとし、形態・構造や使用法において明らかに縄文時代のものとは違った点であるとする。あわせて縄文・弥生時代の礫石錘の地域性についても論じ、沿岸部や遠洋などの使用環境による変化など、漁撈のあり方との関係を論じた。

第二章では古墳時代のイカリ(碇)については、その実物が稀少であることから、古墳や横穴墓の壁面に抜かれた線刻画の船と碇の描写から、当時のイカリの形態を復元し、大型の準構造船や内水用の小型船も、同様に楕円形の自然礫に近いものに綱を巻いた構造であると推定する。また、古墳の線刻の時期比定については、追刻された可能性が高い鳥取県青谷町所在の阿古山古墳や千葉県富津市所在の岩坂横穴墓に描かれた後世の追刻と思われる線刻画との対比によって、古墳時代の船との構造や碇の形態の差異を示した。いっぽう、古代においては文献資料である万葉集や風土記の中から、碇に関する記述を抜き出して検討し、倭語である「イカリ」が「沈石」や「重石」の字を当てて表現されており、形態を端的に表すものである」と述べる。その後、外洋を越える船が利用される九世紀頃には、碇の形態

は飛躍的に発展するとし、その例証として、遣唐便船を描いた『東征伝絵巻』や『華嚴宗祖師絵巻』に描かれた新羅船の船首にみえる碇の特徴から、船首の碇は碇巻き上げ機の盤車(日本では轆轤)が使用されたことを論じた。

第三章では慈覚大師円仁の『入唐求法巡礼行記』に記録された、遣唐使たちの渡海の様子や、旅の途中での航海の記録を通して、遣唐使船と新羅船における碇の使用方法について検証した。それは東アジア世界で汎用されていた木石碇であり、碇巻き揚機である盤車を巧みに使用したものとして、古代における碇の具体的な使用方法を論じた。

第四章では九州北部で出土例の多い碇石を集成し、その形態的な特徴を比較して元寇船の碇との違いを明確にした。長崎県松浦市鷹島の海底から出土した元寇船の碇は、二石に分かれた左右対称一対型の碇石であり、これまで博多湾や佐賀県の海岸で発見された一石の角柱状の碇石とは明らかに違うことを指摘し、これまで蒙古碇石と言われていたものは、実は中国貿易船のものである可能性が高いことを論じる。

第五章では中世の碇について、『蒙古襲来絵詞』などの絵画資料等との比較・対照検討から扁平長楕円形の榛を木製の碇爪で挟む形態の「唐人碇」と呼ばれるものであることを指摘し、実際の資料の例をあげて論を補強する。とまた考古資料としては各地に残る和船の碇石を紹介し、その特徴を紹介し、補完的資料とした。

第六章では鉄製錨（以下では鉄錨）の登場とその原因を論じ、近世に入ると日本の軍船が鉄錨を装備するようになるとし、特に朝鮮役で活躍した安宅船や関船には四爪の鉄錨が装備されることや江戸時代には弁才船にも鉄錨が装備されることを指摘する。その鉄錨普及の要因に対して、鍛造技術の進歩とその普及、海洋に生息するフナクイムシによる木質部の食害等に起因して、堅牢な鉄錨の普及が要求されたと考えた。木石碇がフナクイムシに蝕まれた証拠として、長崎県松浦市鷹島町の海底から出土した太碇の碇爪の食害痕を提示した。

第七章では近年、国内で発見された碇石について、新出・新発見資料について、事実関係を詳細に紹介し、その結果、これまで碇石の確認例がなかった太平洋岸での発見例等から碇石の分布について論ずる。加えて、南西諸島及び沖縄では角柱状の碇石が発見され、これまで北部九州を中心に分布していた碇石が中国貿易船のルート上で発見され、しかも形態的な特徴が一致することから、これらが中国貿易船のものである可能性が浮上し、博多湾や五島列島の小値賀島の前方湾から出土した碇石が中国貿易船のものである可能性を指摘する。

終章では上記の六章を整理して、先史時代から近世にいたるまでの石製碇の変遷と終焉についてまとめるとともに、繫船具の変化の要因と史的背景について論じた。

## 〔2〕 審査結果の要旨

以上のような構成と内容からなる本論文の特色および特筆すべき点としては以下の四点

に整理できる。

第一に、これまで考古学・歴史学の研究では取り上げられることのなかった繫船具について、資・史料の集成的研究と個々の事例の精査を行ったことにある。

具体的には第一章の縄文時代に関しては、精緻な集成を行い、それに基づいて出土状態や伴出遺物との関係、分類や時期的変遷を検討するという物質資料による研究の基本に立脚した方法によって、資料とその情報の限界性を知悉した考察を行い、形態的に類似する遺物群のなかから繫船具の可能性のある一群を抽出するという堅実な結論を得ている。

第二には、これらの資・史料の特性に基づき、時代によって考古学資料・文史料・絵画資料等の資料を相互批判的に用いて、実証的な検証を行った点である。これは、本論文の基本的な方法の一つであり、随所で用いられているが、第二章の古墳時代の繫船具の考察や第三章の『入唐求法巡礼行記』を用いた古代の繫船具の検討および第五章の中世の繫船具の考証に顕著である。

考古学資料・文献史料・絵画資料等の属性の異なる資料を複合的に用いることは、考古資料の熟覧と観察、文献の読解、絵画等の図像学的考察などの多方面の基礎的な知見が必要なことはいうまでもなく、各々の資料性の限界を知悉せずに安易に混用すると、往々にして恣意的な解釈に堕することがある。この点においても、本論では多様な資料の条件を熟考し、各時代の繫船具の同定を行った。

第三としては、以上のような繫船具とその使用方法やこれを用いた航海術に対する精密な技術的な考察にとどまらず、これらを用いた航海技術やさらには海上交通の時代ごとの史的背景を論じたことである。

第四として、繫船具の変化過程をとらえるに際して、人文学以外の視点を導入した点である。船の構造や航海技術さらにはそれらから派生する時代ごとの地域間交渉のあり方などの観点についても考察が及んでおり、文化史的な論考としても本格的な構成と内容をもつにいたったことである。すなわち、先史時代から近世までの繫船具の変化のなかで、材質的な変化の画期となる近世について、木造の船体や木製の船具に食害のあるフナクイムシへの対処との因果関係を想定し、実際に出土した中世の木製繫船具に食害の痕跡のあることを論拠として立論しており、仮説としての蓋然性を高めるのに一定の有効性を担保することとなった。

第五としては、本論文の論旨と関連して付論としてあげられているように、これまで周知されていなかった繫船具の新たな資料を発見し、一次資料ともあわせて提示を行った点である。本論のように実物資料を用いた体系的な研究においては、たんに新資料の紹介にとどまるのではなく、資料操作の基本となり、考察の妥当性を担保することにおいて方法論的な要諦であることを示すものである。

以上のように本論文は繫船具を対象として、文献史料のない先史時代などに対しては出土遺物等を主体とし、伝世資料などの実物資料を主体的に用い、その型式分類や時間的変遷などの基本的な事項に対して、対象となる資料群を類別化することにより機能を特定す

るという考古学の基本的方法に忠実に論を展開している。

その後、時代が下るにしたがい文字資料が増加していくにつれて、本論文の考察対象である繫船具の実物資料は例数を減じていくが、これに対して、本論文ではできる限り同時代的な史料・文献や絵画資料などを用いて、繫船具の具体的な使用方法や機能を明らかにした。さらにそれにとどまらず、船の付帯物としての繫船具の属性から、これらを用いた航海技術やさらには海上交通の時代ごとの史的背景にまで論及している。すなわち、繫船具を媒介とした時代ごとの文化史を企図しているのであって、この点において、たんなる個別資料の分析からは大きな展開をみるにいたっている。

繫船具や航海技術の比較・対照の資料として用いた『入唐求法巡礼行記』『蒙古襲来絵詞』等はいずれも膨大な研究史があり、今後は、それを踏まえつつ、これらの史・資料の多角的かつ複眼的な視覚から検討することによって、さらなる研究の展望を開くことも可能となろう。また、二〇世紀後半以降、中国・韓国の沿岸地帯を中心として水中考古学の成果による沈船の資料が相当な数の蓄積をみており、そのほとんどが本論で取り扱った資料と同時代に属する。本論では日本列島における繫船具の変化要因を、中国・朝鮮半島に求めるという立論方法となっていることから、これらの同時代の東アジア資料との比較は必須である。東アジアの沈船に関する報告や考察は原語で書かれており、これらの報文・文献の精査により、東アジアの繫船具との比較資料の面での研究の深化も期待される。さらに近世における鉄製錨の出現の契機に関してもフナクイムシの食害の他に、製鉄や鍛造技術を中心とした生産基盤やそれを取り巻く社会的要因の検討が求められよう。この点は本論でも示唆されているが、このような検討を一層深化させることによって繫船具を媒介とした社会的画期の考察の展開が期待される。

以上、本論文はこれまで資料の事実認識に留まっていた繫船具に対して、考古学資料・文献史料・絵画資料等を用いつつ、それらの資料的限界を知悉して、各々に対する基本的な方法論にのっとり、古代から近世にいたるまで文化史的な位置づけを行ったことが特筆される。

よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいと判断する。